

わが国における

現代の母子関係をめぐって

山崖 俊子

一、現代の子どもの状況

八月十五日も過ぎた。戦後四十六年を経過した。もはや「戦後」ではないという。時代は変わった。子どもを取り巻く状況の様変わりは激しい。子どもが変わった。

我々大人たちは、子どもが見えない、わからないという。さらに若い親たちも何を考えているのかわからないという。

ある高校の社会科の教師が困惑した表情で次のように語った。

「日本史の授業で、織田信長と豊臣秀吉と徳川家康の

特徴を語る例として、挙げられる句に次の三つがある。

つまり、

『鳴かぬなら殺してしまおうほととぎす』

『鳴かぬなら鳴くまで待とうほととぎす』

『鳴かぬなら鳴かせてみようほととぎす』

そこで生徒たちに、君たちならどれを選ぶのかをたずねた。すると、どれも自分たちの好みではないといひ、

『鳴かぬなら鳴くのを買おうほととぎす』

がいいと答えた。このことを一体どう理解したらいいだろう」というものであった。



まさに現代の物質文明の申し子であることを象徴するかの現象である。

また、ごく最近、都心の繁華街の公立中学校に転動になったばかりの教師から、次のような相談を受けた。

「とにかく授業にならないのです。授業中何人もの生徒が、しかも彼らは勉強面ではできる方の子どもたちなのですが、フラ／＼と教室を歩き回り、時には裸踊りまですててしまうんです。みくまで何かしようと思案しても、そんなことして何になる……ものいうは金だ……などと口走るのです。結局クラスをまとめようと思えば、力で支配せざるをえなくなり、怒られてもちっとも感じないふうなのです。教師って何なのだろうと無力感にとられ、停年を待たずして止めていく仲間がたくさんいます」

この地域は、戦後の急激な土地高騰の影響で狭いところに高層ビルを建て、住居は最上階にあり、父親も特に労働していない家庭が多いという。

これらの話は、いずれも、資本主義社会の経済性優先

の姿を象徴的に表しているといえよう。

これを短絡的に教育の問題と結びつけると次のようになる。それは、今の子どもは耐える力がない、従って、「心の鍛錬」が必要であり、そのためには、スポーティな道を通じて欲求不満耐性を養わなければいけないというものである。

一方、子どもたちは一見、無感動で、怠慢で、無責任で他罰的そのものといった態度を見せながら、実は内的には極めて焦燥感と自信のなさ、そして自責の念に駆られているといった資料がある。

NNSR（日本テレビ・ネットワーク・システム・リサーチ）がまとめた調査、「子どもの生態系が変わった」（日本テレビ、一九八五年）の中で、小学校三年生から六年生までの子どもの「好きな言葉」についてまとめたものだが、方法としては、子どもの「好きな言葉」を自由記入してもらい、上位三票ずつを集計したという。

その結果は、男子のトップが「努力」続いて「根性」「勇氣」「必勝」「忍耐」「一番」と続いている。女子の

トップは「友情」であるが、二番目に「努力」そして「希望」「根性」「友だち」「愛」「勇氣」と続く。

この結果をみると、恐らく誰しもが子どもたちの「けなげさ」に驚くに違いない。けなげというより、絶えず他者との間の競争に駆り立てられ、勝てない原因を自身自身の努力の足りなさに求め、自信をなくしている。内面は不安の渦で一杯である。

大人たちの集まりで私は次のことを質問する。「みなさんが子どもの頃と今の子どもたちとを比較して、どちらが幸せだと思いますか」と。

この質問に対して例外なく、「自分たちの子どもの頃の方が幸せだった」と答える。もちろん幼い日のノスタルジーということも考慮に入れるべきではあるが、それにしてもである。

直観的に今の子どもたちを取り巻く経済的豊かさと同様に、拭い去ることのできない不安感を感じ取っているからに違いない。

思春期における「登校拒否」の激増ぶりも不安を感じ

る一因となつていよう。その他、神経性食欲不振症。過食症を中心とした摂食障害、対人恐怖症、強迫神経症を中心とした神経症、分裂病、境界例など数量的にも増加し、また表れ方も時代と共に変化してきているといわれる。

子どもを取り巻く、このような状況の背景を探り、可能な対応の方法を検討したいと思う。

二、母子の関係を規定するもの

子どもの問題が語られるとき、決まって取り沙汰されるのが、「母親批判」である。「母原病」は古くて新しい言葉であり、最近「母親は首に巻きつく蛇」などという言葉まで登場した。

確かに、子どもの育ちにとって母親の影響が大であることは、ポオルビィに逆のぼるまでもない。しかしながら、それほど単純な因果関係で語れるほど母子の関係は簡単ではない。

(1) 子どもの側の要因

私たちは日常の臨床経験の中でよく経験することなのだ、**「この子は小さいときから何となく気になる子どもでした」とか「とても育てにくかった子どもです」という話を耳にする。もちろん、子どもに心配を感じているときは、過去のことをアレコレと悲観的に思い起こすものではある。**

その点は十分に配慮した上で、登校拒否の母子関係について、その関係性を規定する重要な因子として、乳幼児期の子どもの中にある**「育てにくさ」と「育てやすさ」に着目し、分析（注①）を行った。**

その結果、登校拒否児の母親の方が、コントロール群の母親に比べて、**「乳幼児期の子育てについて他のきょうだいより手がかかった」という印象をもっている者が圧倒的に多かった。**

その内容については、①食べなくて困った ②虫や音などをひどく怖がった ③泣くことが多くて困った ④母親から離れなくて困った というものであり、登校拒

否児の母親は、幼少期よりわが子に対して何となく気になりながら子育てをしていたという。

これに対して、コントロール群の母親で、子育てに手がかかったと感じているものは、その内容について明らかな違いがあり、①動きが激しくて手をやいた ②手を洗う習慣をつけるのに手をやいた というものである。

この比較調査は母親の主観によるものであり、従って、この結果から直ちに、子どもの乳幼児期の客観的状況を推測することはできない。

しかしながら、この調査はただ単に登校拒否群とコントロール群を比較したのではなく、それぞれきょうだいをもっている者だけを取り出し、他のきょうだいとの比較の中で感じた子育ての印象について、両群間の比較を行ったものであることから、登校拒否群の母親が自分の子どもに対して、その乳幼児期に子育てに手をやいたという印象はないが、何となく気になった、何となく不安だったという印象をもちながら子育てをしてきたことは確かである。しかも、気になったり、不安になった原

因が、子どもの食の細さ、虫や音への恐怖感、泣くことの多さ、母親からの分離のできなさなどで、いずれも、他のきょうだいには感じられない。「神経の過敏さ」や「不安の強い」傾向を、すでに二、三歳の時期にもっていたことがうかがわれ、そのことが、その後の母と子の関係に影響を与えていることは容易に推測される。

(2) 母親の側の要因

子どもに与える母親の影響を考えると、固定的な性格分析を母親に対して行い、短絡的に子どもの行動と結びつけて語られることが多い。

もちろん、それは重要な意味をもってはいるが、子どもにとって大切なのは、客観的事実というよりも、むしろ、各々の子どもが受けとめる母親像である。あえて極端にいうならば、客観的母親像が例えどうであろうとも、各々の子どもが、母親を肯定し、受容できていれば、そして、子どもが自分自身を肯定し、受容できれば、その関係は問題ではない。

しかも、母親を肯定し、受容に至る過程は紆余曲折があつて、何度かの変転をみなければならぬ。従つて、どの時点で「関係」をとらえるべきか、余程慎重でなければならぬ。

さらに、母子関係の中でも、従来から強調されている乳幼児期を中心とした濃密な母子接触の重要性についても、もちろん、異を唱えるものではないが、ポオルビィに始まつて、ともすると、その形で因果関係を語ろうとする者は未だ少なくない。この点についても新たな検討を加えたい。

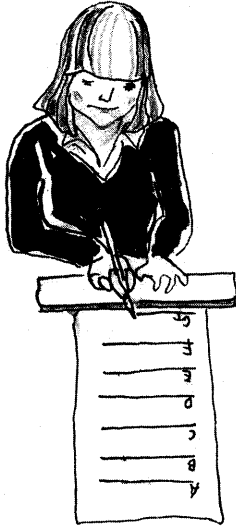
共働き家庭が年々増加しているというのに保育所保育を「できれば避けた方がよい」「背に腹は代えられぬ」と否定的にとらえる専門家も少なくない。

とくに我が国の理想的母親像は、自己犠牲的に子どもの側に立つ姿である。

従つて、日本の保育界の大半を支えるのは、女性保育者であるから、彼女らは、我が子を理想的に育てたいという期待と、保育の専門家として良い仕事をしたいとい

う期待とは、相容れない結果となる。自己矛盾を抱えて生きるということは、母子関係に少なからぬ影響を与えるはずである。

小学校二年の登校拒否児を抱えた、母親F子は、専業主婦であるにもかかわらず、自分が「子どもを可愛いと



思い、子どものために全エネルギーを注いでこなかった」と、「子どもに申し訳ないことをした」と厳しく自己批判を繰り返し、そんな自分をどうしても肯定的に受け容れられず、一年以上も抑うつ状態が続いている。

「子ども好きでなくてはならない」「よくつき合っていないければいけない」というのが、我が国の母親をしるべき強力な掟となっている。

これらのことは筆者にとっても極めて大きな不安であり、単なる思い込みに過ぎないのか、あるいは、どの部分が重要な鍵なのか切実に知りたいと思った。

以上のことを念頭において、子どもが母親を肯定し、受容を可能とするために、欠くべからざる条件は何なのか、を知る手がかりとして、現代の女子学生（高校生、短大生、女子大学学生、共学大学学生）の就労や社会参加、子どもを持ったときの子育ての姿勢と自己実現のしかたなどについて、娘が母親の生き方をどのように評価するか、との関係でとらえようとした。（注②、注③）
その際、女子学生のみ調査対象としたのは、母親と同性

である女子学生が、自分自身の将来をイメージするとき、母親をどう評価するかは避けて通れない課題である。従って、母子の関係をとらえるには、まず女子について検討することが有効であると考えた。

その結果、母親の生き方を娘が肯定し、受容するためには、母親の生き方の形態ではなく、姿勢であることがわかった。つまり、母親自身が矛盾を感じることなく、「生き生き」と生きている。その姿勢が極めて重要であるというものである。

三、今後の課題

今年度上半期の話題ナンバーは何と言っても、「出生率低下」つまり一人の女性が生涯に産む子どもの数の平均が一・五三人となったというニュースである。

その原因についてはさまざまに分析されているが、筆者は次のことが大きな問題であると感じている。

前述したように、今の時代、子育てが、いや人が生きることが極めてむづかしくなっている。

ところがその責任は圧倒的なウエイトで母親の側に傾いている。単身赴任を例にとってみても、今や特別な現象でなくなってきた。母親の子育ての責任は重い。

また結婚年齢が高くなっているが、高齢出産は障害児出産の比率が高いといわれる。

障害児をもったときの母親の責任の重さは他と比較できないほどである。

筆者はこの夏、典型的な日本の農家で何日か過ごした。そこでは、土間に続く居間に、いろりこそ今はなくなったが、村の長老格を囲んで村人が朝から何人も入れ替わり、立ち替わり訪れ、食事時には、居合わせた人はみな一緒に食事をし、風呂をもらいにくる人もいる。こうして、お互いが協力し合わない、農家はやっていけないわけだが、都会の生活に慣れた、いわゆる近代的自我の持ち主は「プライバシー」をめぐる、葛藤を生じる。

ところが一方で、孤立感、孤独感はない。従って、子どももみんな育てている感じ、例え、障害のある子ども

もであっても、それはそれとして「お互い様」の関係である。筆者はこの状況を「たし算の文化」と名づけた。各々が各々として生きながら、各々、たし算したところで集団として力が発揮できればいいという印象である。

一方、都市部の生活に戻ると、その違いが極めて明瞭となった。つまり、集団がないわけだから、各々のところで自己完結していなければならぬ。親も子も、各々、力量の違い、個性の違いがある。にもかかわらず、各々が同じ程度まで肩を並べなければ生きていけないのであり、それを孤軍奮闘で母親一人頑張って達成しなければ支えてくれる人などいない。

母親の肩に重くのしかかる、責任の重たさは、「子どもを好き嫌い」などといっていられるほど軽いものではない。

その上に、日本の母親の理想像に対する過大な期待が重なって、日本のこれからの女性は益々、子産み、子育てに抵抗を示さざるをえない。「一・五三人」はそうした女性の気持ちの表れといえよう。

だからこそ、まさに今こそ、子育てをもっと自然な、当たり前前の営みとして楽しめるために、さまざまな偏見、とらわれから解放たれることが必要であり、今回そのための実証をわずかではあるが成し遂げることができた。更にこの作業を続けていきたいと思っている。

△注▽

①山崖俊子他「登校拒否児の乳幼児期における親子関係」――

「育てにくさ」と「育てやすさ」について――『小児の精神

と神経Vol. 30』国際医書出版 一九九〇

②山崖俊子他「母親の生き方が子どもの生育におよぼす影響に

ついての基礎研究 その2」日本保育学会第43回大会研究

論文集

③山崖俊子他「母親の生き方が子どもの生育におよぼす影響に

ついての基礎研究 その3」日本保育学会第44回大会研究

論文集

(津田塾大学)